昭和前期における
岐阜県の綴方教育（一）

高橋　弘

一

大正七年七月に創刊された雑誌「赤い鳥」が、鈴木三重吉の私財を投じての必死の努力も空しく、昭和四年三月号をもって、休刊を余儀なくされる事態に立ち至った。無念の思いをこめて三重吉は「赤い鳥休刊の辭」を書いているが、しかし、「赤い鳥」をこれで終わらせてなるものかという、強い思いがあふれていた。その中で、綴り方、自由詩について、三重吉は次のように述べている。

……「赤い鳥」が亡びでもすると全然指針を失って廃滅しさうに思はれるのは自由詩であり、指導の中心がなくなる意味で、綴方の發達をも鈍くするかと気づかはれます。それで「赤い鳥」をやめても、少くとも、自由詩、綴方、童詩童謡とだけは、指導していきたいと思ひます。…（中略）…綴方では、最近に、東京市教育課の懇請により、全市の小學校の綴方主任二百名あまりの人々のために講演會を開き、綴方なるものの根本の意義と指導法とについて、私の十年間の研究を傾けてお話をしましたが、かういふ點にも、私の時間の許す限り、各地方へも出張して奉仕したいつもりです。……

これ以後、「赤い鳥」復刊を目指して三重吉は、要請に応じ、綴り方講演のため全国各地へ出かけて行った。その三重吉が、岐阜で最初の講演を行ったのは、昭和五年七月のことであった。このときのことを回想して、川口半平が次のように書いている。

岐阜を中心とした私たち綴方人は、加納小学校で座談会を開いて、彼の話を聞いた。…（中略）…

主として国定教科書の国語読本に載っている詩について批評した。ボロクソにこきおろして、こんなものは詩でもなんでもないと言った。私はふだん自分たちの扱っている教科書に対し、

こんな酷評を聞いたことは初めてだったが、何か心に重く響くものがあった。そして、形象の読方のなんのと、こざかしい理論にのみふけっていて、文学感覚の貧しさに気づいていない、実際指導者の心の稀薄さが反省させられた。

「意外なほど教師は『赤い鳥』を読んでいない。『赤い鳥』が倒れたのは、私があまりに高踏的で、人に説かなかったからでもあるが、教育にいちばん大切な詩的精神が教師に欠けていたからでもあった」

と、彼は言った。…（中略）…

三重吉が各地を講演して回ったのは、『赤い鳥』を会員組織にして復刊するため、支部設置が目あてだった。そして、それは岐阜においては成功だったと言っていい。翌日長良小学校で講演し、来聴者三百名、入会者が二百二十二名。岐阜は赤い鳥支部の第一号となった。（『花ぐるみ』）

またこの時、加納小での会に参加した本巣郡穂積小訓導・加集とみが、翌年の復刊「赤い鳥」七月号の通信欄に、次のような一文を寄せている。

鈴木先生、私は當校の三年生の擔任でございます。幼少から創刊號以來拜見してをりますもので、小さいときから常に先生の御人格にたいしお親しく思ってまゐりました。昨夏本縣の女子師範でおそば近く御講演を承りうれしく存じました。私は今低學年の綴方研究を命ぜられてをります。ぜひ先生の御意見に從ひよい成績を上げたいと思ひます。大正八年十一月號から載りました先生の「綴方の研究」はその後御本にでもまとまりましたでせうか。[注(1)]

「赤い鳥」に載る綴り方、自由詩、自由画などの具体的な作品を通し、自由で、伸びやかで、生き生きとした子どもたちの姿と、その新鮮な感覚、表現力を感じとるようになってきた教師たちにとって、鈴木三重吉からじかに話を聞くことができるというのは、かなりな魅力であったに違いない。前掲二つの文からは、その時の雰囲気の一端を感じ取ることができる。

「赤い鳥」復刊へ向けての鈴木三重吉の情熱、努力、そして全国多くの支持者の働きが実って、「赤い鳥」復刊第一号が刊行されたのは、昭和六年一月であった。その一月号の通信欄には、岐阜の「記者」名で、「岐阜縣稲葉郡（岐阜市外）長良小學校内に『赤い鳥』會岐阜縣支部が設立された」ことが報じてあり、その後に岐阜縣の「赤い鳥」推薦者として、次のような人が挙げられている。

石黒禎一（稲葉郡長良小學校長）、小木曾旭晃（岐阜日々新聞社）小川卓爾（女子師範附屬小學校主事）、川口半平（男子師範附属小學校訓導）、加藤氣作（岐阜市梅林小學校長）、横山廣利（同市明徳

小學校長)、横山　普(女子師範附屬小學校訓導)、高木英一(稲葉郡本荘小學校長)、梅澤英造(岐阜縣視學)、大野丈助(岐阜市白山小校長)、山崎久蔵(男子師範附屬小主事)、馬淵孝一(岐阜市本郷小校長)、寺澤新作(安八郡神戸小校長)、東　前豊(岐阜市學務課長)、佐藤貞治郎(同市京町小校長)、宮崎半助(岐阜縣教育會幹事)、關谷國治(岐阜市金華小校長)

更にまた、「赤い鳥」購読會員名簿欄の岐阜縣の項には、本荘小學校殿(三五冊)長良小學校殿(三〇冊)、川口半平殿(三〇冊)、上田英一殿(二〇冊)、奥村靖雄殿(九冊)などとして六十三名の名前が挙がっている。

この通信欄にあるように、「赤い鳥」推薦者として、当時の岐阜県小学校教育関係の錚々たる人たちに多く名を連ねてもらい、「赤い鳥」購読会員を多数獲得し、また、新しい支部組織設置の面でも岐阜支部が全国第一号となるなど、三重吉の講演会は、川口が言うように、「岐阜においては成功だった」と言えるであろう。

三重吉を岐阜に招き講演会を開催すること、多数の「赤い鳥」購読会員を獲得して「赤い鳥」岐阜支部をつくること、そして「赤い鳥」復刊を実現するために、同じ思いを持つ人達に精力的に働きかけ、労をいとわず活動を続けたのは、当時、長良小にいた福富高市である。更に彼は、「赤い鳥」岐阜支部の事務局の仕事も引き受け、「赤い鳥」休刊中はもちろん、復刊後も、「赤い鳥」の支持層拡大のために人々に呼びかけ、活動を続けた。

福富が、三重吉の講演会終了後、支持者に宛てて「赤い鳥」復刊への協力方を要請した文書が、『帽子をかくさせるな』(福富　易編)の中に収められている。

謹啓、鈴木三重吉先生の「赤い鳥」についてお願ひいたします。

「赤い鳥」は過去十一年間、学校、家庭に於ける児童の読物として発行されました純情な雑誌で、只今の新しい童話、童謡、童謡の作曲、自由画、自由詩を創始し、小学校の綴方を根本的に改革指導して、教育上多大の寄与を続けてまゐりましたが、主宰、鈴木先生の態度があまりにも高踏的で人に説かず、宣伝を好まれなかったために、広く世間に知られることなく、先生が多くの私財を投ぜられたにもかゝはらず、遂に昨年休刊の止むなきに至つたのであります。

そのため御考慮深い御家庭では、お子様にお与へになる雑誌にお困りになり、また、学校方面では綴方や自由詩等のよい指導目標を失つて嘆いて居られる向も多いやうに承るなど少からぬ影響をうけることとなりました。

それで、今度、多年の愛読者であつた御家庭と、「赤い鳥」に導かれてきた小学校の先生方が一緒になり、全国的に発起い

たされ、五千名の会員を募ることで再刊して貰ふことを計画し、数回にわたる鈴木先生への懇請の結果、漸く快諾を得ること、なりました。

何卒、至愛なる児童諸君のために、「赤い鳥」が復刊し得ますやう、率先御加入下さいますやう、尚、御知己を御一名でも多く御勧誘下さいますやう伏してお願ひ申上げます。

鈴木先生は、去る七月八日に、わざ〳〵御来岐下さいまして、県下の教育家二百名のために、長時間にわたり、先生の独創的な綴方教育の根本について御講演下さいました。

先生の力説せられました点は、

○　綴方は単なる表現の習練ではなく、芸術的品性陶冶の重要なる教科であること。

○　それによつて人間性の根底を養ふのが目的であるべきこと。

○　又、綴方は児童の全人格と環境との反映であるため、個々の児童を根底から知り得る意味に於て、教育上、最枢要な基礎的資料となること。

○　綴方を向上させるためには、児童に熱愛を持つ指導者が絶対にすぐれた作品を、正しく深く味はひ示すことが根本の手段であること。

等でございました。

「赤い鳥」は、毎月全国的に傑作を選出し、それについて、先生の鑑賞批評を詳細に記述され且つその他の種々の指導法を説かれるのですから綴方教育の上では、最高目標であるといつても過言ではないと信じます。

敢えて御加入御支持を懇請して止まない所以でございます。

敬具

追つて、この「赤い鳥」誌は、会員組織のこと故、一切書店には出さず直接会員に配本することになつてゐますので、岐阜県下の会員数を取纏める関係上御賛成の上は至急当支部へ御申込みを願ひます。（既に何らかの方法で御申込みずみの方は御返事下さるに及びません）会費は一ケ月三十銭でございますが、発刊の折あらためてお知らせ申しますから其の節「赤い鳥社」の方へ直接御送金下さるやう併せてお願ひ申上げます。

岐阜県　長良小学校内

赤い鳥　岐阜県支部

「赤い鳥」を支持して下さる方々へ

福富は、この頃は長良小訓導であったが、本荘小に在職した大正期末を中心に、以後転任を重ねた錦津小、久々利小、方県小、島小で指導した綴り方が十七篇、自由詩が六十八篇、休刊までの「赤い鳥」に掲載されたほどの指導力を持ち、鈴木三重吉にも目をかけら

れていた。三重吉が地方行脚の早い時期に岐阜県へやってきたのも、福富との縁からであったと思われる。

前掲『帽子をかくさせるな』には、鈴木三重吉から福富高市宛の書簡も収められているが、この岐阜県における多数の「赤い鳥」会員の獲得のための福富のもろもろの活動について、

引続き御奔走下さり、御寧日なき御容子で御健康に障りはしないかと心配です。からだに御無理をして下さらないやうにお願ひします。目下、登録三六三六、九月中には必ず五千になりますから御安神下さい。東京府（市をもこめて）はまだ八三一で、これから市内の各学校に宣伝します。視学諸氏の応援あり、有望です。府県として、二百を越してゐるのは、右の外、千葉三五六、大阪二四〇、と貴市のみ、貴市は今だけでも二四四で、全国第三位です。貴市へまゐり皆さんにお会いしますまでは、貴全県で三名のみの会員でした。それが全国第三位になつて貰つたのは実に有難いことです。もうアセラないで下さい。視学さん、校長さんがた、両主事の方々の御懇情には、お礼の申しやうもありません。」（8・30付）

など、福富の努力に対する感謝の念が述べられているものが何通かある。

「赤い鳥」復刊第一号に載った推薦者名とその肩書、三重吉の書簡に挙げてある役職者への感謝の言葉などからは、大正十二、三年の頃、「赤い鳥」綴り方の指導に取り組む福富高市や奥村靖雄らが意志に反して転任させられたり、出身地から遠い学校を転々とさせられたりなど、異端視された時から数年を経たに過ぎないのに、岐阜県の教育界の上層部にも、「赤い鳥」綴り方やその実践者への理解、支持の空気が流れ始めていたことを十分に窺うことができる。福富には感無量のものがあったであろうし、またそのことが、一層「赤い鳥」支持拡大への情熱をかきたてたに違いない。

三重吉の来岐を機に発足した「赤い鳥」岐阜支部は、復刊第一号が発刊されたことで更に力付けられ、組織としての活動を始めたようである。同年三月号の通信欄には、「記者」名で、その動向が報告されている。

▽岐阜縣愛讀家有志懇談會　岐阜縣支部では二月十四日、土曜の夜、岐阜市の全小學校、男女兩師範附属、市外本荘、長良小學校、の有志を中心に全縣の愛讀家有志懇談會を同市で開催。左の條項につき談合する豫定です。

一、各郡部落に部會を設けること。　二、近々愛讀家大會をかね「赤い鳥」講演會を開くこと。　三、「赤い鳥」そのものゝ批評。　四、「赤い鳥」を完全に支援する方法について意見交換。　その他。

この愛読家有志懇談会が、どのようなメンバーでどのように運営されていったのかは不明であるが、通信に挙げてある条項二の「赤い鳥」講演会については実現することになる。

鈴木三重吉は復刊第一号の中で、「私は今度の復刊について、各地の中心者諸氏への謝禮としても、又「赤い鳥」を盛大にする責任から、出來るだけ多くのかた〴〵の理解と加盟とを得る爲めにも、逐次全日本を講演して歩くつもりです。」と述べているが、昭和七年七月、三重吉は再び来県し、岐阜と大垣で講演を行った。

この岐阜における二回目の三重吉の講演会については、福富が三重吉と書簡を往復させ、内容、日程等いろいろ打ち合わせを行っているのは前回の時と同じである。(『帽子をかくさせるな』)

しかし、二回目の時には前回と違って、「岐阜縣教育」四五四号(昭7・6月号)の広告欄に、「七月下旬に鈴木三重吉氏を講師に招いて岐阜市内で綴方講演會を開催する」旨の予告が掲載されている。また、「教育新聞」(昭7・6・15)に、綴方教育講演會を開催する趣旨と、その会を七月二十八日午前九時より、岐阜市本郷小學校講堂において、會費無料で開くこと、主催は岐阜市學務課・岐阜市教育會・岐阜市綴方教育研究會、後援は岐阜縣教育會・教育新聞發行所である旨の案内が載せられている。こうしたことも、この時期、「赤い鳥」の理解、受け入れ基盤が、岐阜県において広がってきている状況を表していると考えてよいであろう。

当日の三重吉の講演内容については、「教育新聞」(昭7・8・15)が一面余りのスペースをとり、「綴方指導の秘訣」(於本郷小學校講演要旨)として紹介している。それによると、三重吉は「赤い鳥」に掲載された二つの綴り方(その一つは、可児郡中小学校尋四・相羽登久子の「おひなさま」)を例に挙げ、それぞれの作品のどういうところ、どういう表現が優れたものとなっているかを詳しく分析しながら、綴り方の見方、教師としての綴り方指導の在り方について語っている。

……或る山岳地の先生は児童の作品八年間のものを持ってゐる。そこで自分もその郷土にゐるから児童の気持をよく知ってゐる。児童の作品を見て「キヤー面白い〳〵」これが先生の鑑賞である。アルコールに梅を浸したやうなもので先生の感化が児童に及ぼす、そこには理窟もない、綴方につき「藝術とは何ぞや」などゝ理窟より本統のものを作り、よいものを見せて自覺せしむる事である。私は綴方のよいものを見せてそれを味はしめんと多大の犠牲を拂ってゐるが教育上應用して呉れぬ。

綴方は文章をよくする爲めの學問ではない、人格的價値――人間的價値を深めて行くのである。イギリスの如きは一教室二十五人であるから、充分に指導して行けるが日本は八十人も収

容してゐるから充分にその個性を知る事ができない。例へば或る大工の子供は數學が下手だ、そこでその人間を馬鹿だといふ、然しそうではない、其人間の長所を見出して味はってやれば伸びて行く、豪い人より、よい人で正しい人、やさしい人を愛護して行くべきである。今の世は智識の教育である。……

三重吉は、綴り方を通して教育の在り方を語っている。そしてその教育の考え方は、昨今の教育で求める考え方、方向と同じものと言うことができる。

二

福富高市は、このように「赤い鳥」の復刊及びその普及のために、支部づくり、会員の獲得、三重吉を招聘しての綴方講演会の開催等に尽力するのであるが、さらに、「赤い鳥」綴り方の行き方に共鳴する岐阜の綴方人を糾合し、昭和七年初頭に「岐阜綴方教育研究會」を組織した。本荘小時代、回りがどう考えようと、自分が信ずるところに従って、ひとり敢然と「赤い鳥」綴り方や自由詩の指導に打ち込み、なかまをつくり、なかまへ働きかけるようなことのなかった福富の変容を、ここに見ることができる。

この時も福富は、三重吉に、綴り方の研究会をつくる旨を連絡したようで、「綴方教育研究会の成立は結構です。議論を交へるのもよいですが、根本は、いゝ綴方を生み出す実際指導を研究しなくてはダメです。これが何より必要です。」(昭7・3・18付書簡)という助言をもらっている。

「教育新聞」第三百三十六號(昭7・1・15)に、「岐阜綴方教育研究會について」と題し、「一會員」ということで次のようにその発足を宣言している。

私たちはこゝに「岐阜綴方教育研究會」といふ、いかめしい名稱で實は極めて自由な親睦的な集りを作りました。

○

「何をやるのか」ときかれたつて「はい、それは」とすぐ説明の出來ぬ程あいまいな集りなのです。たゞこれから考へ考へして「綴方教育を中心に、少しでも何か意義ある仕事をやって行かう」といふ漠としたものだけを意識してゐるに過ぎないのです。

○

「綴方は兒童生活の表現でなくてはならぬ」といふ信念の下に、綴方革新運動が起されてから、もうかなりの年月が經ちました。當時鈴木三重吉先生の「赤い鳥」を中心に捲き起された生活の綴方運動藝術の綴方運動の如きは、其の隨一のもので、私達の全身の感動を惹き起し奮ひ起たしめてくれた旗標の觀があつたのであります。

○

茲に鈴木三重吉先生の言葉を藉りる。綴方にしても「赤い鳥」の創刊當時では、たゞ單に生命なき因襲的作文の課習として機械的に行はれてゐたにすぎず、綴方教授上の權威とされた研究や論議を見ても、たゞ課題方式によるがいゝか、隨意選題に任すべきかといふごとき、滑稽な皮相で、これだけを聞いても、綴方なるものが、いかに没理解をもつて扱はれてゐたかゞ窺へるはずである。今では、實際の多くすぐれた教師たちが、「赤い鳥」に共同して、熱心なる努力を捧げてくれられ、多くのすぐれた兒童の作篇が、當然の如くに生れ出てくることは「赤い鳥」にとつて、つきない喜びの一つでなければならない。

○

「赤い鳥」が下劣なる流俗に對抗して兒童の純情の護育と藝術教育の進展を目ざして、精進すること十年、綴方に於て自由詩に於て、將又童謠、童話、作曲、自由畫に於て、すばらしい水準を作り上げ兒童の作品は、中央の作家たちにさへ驚嘆の聲を發せしめるまでに至つたのであります。然るにこの雜誌が一度休刊になると、綴方は自由詩は、ヂヤナリズムの支配の下に帰してしまひました。

○

今日に於ては「生活の綴方」なる言葉も常識化され、聞き古されて清新なる感激を與へるだけの魅力を失つてしまつてゐるのみならず、若い教師たちはあの火のやうな往時の綴方改革運動を知らず、所謂優良教員諸君に於ては、何時覺えたとも知らぬ、無感覺なる概念「綴方は生活表現なり」といふお念佛に獅噛みついてゐる外何物もないといふ淋しさではないでせうか。

○

いひかへれば、今日綴方を指導するにあたつて、その日暮しでない者が果して幾人ありませうか。綴方を人間教育の一つの教科として主張し、その主張に對して感じてゐた情熱乃至理解を、今日の私達は果して持つてゐるかどうか。なる程常識として一應知つては居ませうが、これを體驗的に味到して、綴方指導の上に眞に生かし得る教師が幾人あるか。綴方に對し（兒童生活そのものに對し）純眞なる情熱を燃し得る教師が幾人ありませうか。

○

斯う考へて來ますと、我らの集りは結局は私達が職分に對しての良心の發動からやむにやまれず來る所へ來たといふわけなのであります。非常に優れた個人は閑居しても新生面を展開して行きませうが、かくの如き人も己の思索體驗を發表する機関

を持つことは楽しみなことだと思はれます。ましてや、ともすれば綴方を、否子供をすら忘れ勝ちな私達に於ては團體的に相互の開發刺戟を試みることの必要が痛切に感じられます。

○

私達はこの研究會を利用していろんな問題に觸れてみたいと思ひます。例へば、先輩の種々なる研究の再檢、生活指導といふその生活とは何ぞやの問題を、根本的に見直すこと。現代の如き思想動搖期にあたつての修身科と綴方科の相關問題乃至藝術科目の統合問題現今の文藝思潮の轉換とそれにともなふ綴方科の諸問題、兒童読物の問題。別しては日常綴方指導の具體的方法研究。等々一寸思ひついただけでもなか〳〵であります。

○

この研究會の同人は現在に於て岐阜市の各小學校。兩附属。加納第二。長良。北長森の同好職員だけでありますが、これだけの者達で獨占しようといふのではありません。唯比較的地の利を得た者達に依つて産聲をあげたのであつて、全県下に亙り同志の加入を希望して止まないものであります。幸にして岐阜縣の綴方教育運動に火を點じ得、優れたる教育者輩出の母胎たり得ばこの會設立の意義は充分達せられるわけであります。

○

發表機關としてこの教育新聞の一部を借りることになりました。今後此の新聞の二三頁を私達の手で編輯し、さし當つて

1　全縣下の兒童作品の推選發表と其の作品の鑑賞批評、指導法の研究。

2　會員の研究發表。

3　月一回の座談會の記録發表。

4　全縣下の同好諸氏の研究の推薦發表。

等に利用する考でゐます。

○

何卒兒童作品の御投稿をお願ひします。尚又御研究の玉稿でも結構です。私達は出來るだけの論議攻究を加へまして發表しお互ひの向上に資したいと考へます。

この時点での岐阜綴方教育研究会の会員は、「教育新聞」の報ずるところでは、早川康一・西尾篤・各務平八・丹羽長（京町小）、福富高市・嶺光雄・松野静雄（長良小）、高橋眞一郎・牧田吉男（北長森小）、安池重壽（本荘小）、坂井正（梅林小）、大塚泰香・江崎範男（本郷小）、遠藤治市（徹明小）、奥村保・宮脇太郎（加納小）、水谷意啓（白山小）、西村時二（金華小）、石田博雄（明徳小）、田中峰太郎（加納第二小）の十九名である。

このようにして発足した「岐阜綴方教育研究会」は、「教育新聞」

に改題新設された「少年少女綴り方」欄を担当し、折々に二面程度のスペースをとって、児童の綴り方、その評、文集紹介などを行っている。その二三について見てみよう。

ざんぱつ

稲葉郡北長森小尋四　平光英治

十二月二十三日の事だ。弟とくるつて遊んでゐると、おつ母さんが、あわてゝうら口から入つて見えた。僕は何だらうと思つてゐると、「英治、ざんぱつ、かつたるに早うばりかん持つて來い。」と言ひなさつた。うん、もうお正月が近いし、頭の毛も大分のびたで、かつて下さるのやなんと思つて早速たんすの上置へ行つて「安良田町」と太く大きな字がそめ込んである大きなつぎきれと、ばりかんの入れてある箱と小形のほきを持つて來た。小形のほきはもう長い間使つてゐるから眞中あたりは三分の一ぐらゐ毛がない。

僕はざんぱつはきらひではないが、弟たちはなんでや知らんがいやがつて、「兄様、さつきやつてまへ。」「小さいもんぢゆんにやつてまやえゝがえ。」などとあらそつてゐる。中でも郁男が一番きらひらしい。

おつ母さんはそれを知つて見えるから、「利、さつきかつたるに來い。さつきやとよう切れるでえゝに。」と言はした。利夫が頭をかきながら、目をしかめて、いかにもいやそうな顔をしておつ母さんの所へ行くのを見ると、郁男は、「さつきやとよう切れるで、頭から赤血が出るに。」とおぶつだんの前で兩手をふりまじめくさつて言つた。そのかつこうは、かるたについてゐる『ニクマレゴ』の繪にそつくりである。おつ母さんはにこつと笑つて見えた。

おつ母さんは、利夫の首にさつきの大きなきれをまるけて、前掛をしたやうにしなさつた。ばりかんは此の間おぢいさんに買つてもらはしたので、新しくて油でよう光つてゐる。「じやき〳〵じやき〳〵」と毛がかれる音、ばりかんの上へむく〳〵と毛が小さな黒山をきづく。おつ母さんの五本の指が自由に動く。頭のてつぺんまでからつせると、庭へぽいとほかりなさる。

僕は修治のお守りをしてゐたが、ぐざるとおつ母さんの所へ行くで早うかれん。そう思つて、「修さ、おんま（うま）見につれてつたるに、おんさい。」と言つておんで舊道へ來た。舊道の東の方では、女の子が縄飛やお手玉をして遊んでおられる。こゝでは遊ぶつれがないで新道へ來た。洋服屋の義つさがぬはつせるみしんの音が「しやき〳〵しやき〳〵」と聞えて來る。街道には電車、自動車、自転車が後から〳〵續く。

三四十分そこらで遊んでゐると、郁男が今かつてまつたばか

りの頭を戸口から出して、「兄様、おつ母さんがよばつてござるんな。」と言つて呼ばつた。郁男の頭が太陽の光にあたつてすべ〳〵に光つて見えた。早速走つて家へ來た。

家へ來ると庭には頭の毛で蟻のかたまつたやうにすてゝある。おつ母さんはあがりはなに腰掛け、新聞紙をしき、ばりかんの機械をくだいていち〳〵水油をさしてよう動くやうにして見えた。おつ母さんの手は油で光つてゐる。油をさいてまはつせると、「かしや〳〵」と二三度動かして見て僕に「それ、かつたるぞ。」と言はした。僕は修治を臺所へおろし、上りはなに腰掛けた。利夫がやつてまつたやうに、きれを僕の首に巻きつけなさつた。「しやき〳〵しやき〳〵」とばりかんは頭の上をすつて行く。僕は何時ものくせで目をつぶつたら今日は何でかおつ母さんの手が鷲の足のやうに感じた。その中に五六本の毛がばりかんにひつかゝつてぬけた。僕は思はず「いたい。」と言つて急に目を明けた。おつ母さんはかるのを少しの間やめて「かね〳〵」と言ひなさつた。その中にみんなかれてしまつた。今日は何でか早うかれたやうな氣がした。かつてしまつたあとはすーとしていつもより寒かつた。

あとで本家の喜久君もかつてもらはれた。みんなかつてまはつせるとおつ母さんは、『安良田町』とかいた大きなきれをたゝみながら、「おれがざんぱつやさやつたら、十錢つとつても四十錢もうかるになん。」と言つてにこにこ笑つて見えた。

（評）　觀察が行届いてゐるし子供らしい感じがよく出てゐるのでざんぱつの様子が目の前に浮びます。（昭7・8・15）

◇

尋一文集「ナカヨシ」について

明徳校尋一二部の文集「ナカヨシ」を拜見、「十分批評するやうに」との事でありましたが、一讀する中、ついつり込まれてしまつて、批評どころでなく大いに愉快になつてしまいました。「藤川君、小森君、高橋君、高折君」などのが特に印象的で面白いと思ひました。其の他の諸君のもいずれ劣らずよく出來てゐます。指導の先生の御態度に今更感心いたしました。何年級の子供に讀んでやつてもよく、十分一時間や二時間の教材となり啓發されるところの多いものと思ひます。御希望の方は明徳石田先生へ御照會下さい。多分余冊があることゝ存じますから。（同人A）

（昭8・5・13）

◇

選後に先生方へ

△綴方成績の處理についての反省すべき點は、兒童に對して親切叮嚀であつたかどうかゞ第一であると思ひます。

△どの作品にも丹念な批評をつけるばかりが親切ではありませぬ。讀んでやるだけでも兒童は教師に對する信頼の心を失はないでせう。

△評點の甲乙をさゝやき合ふ間はまだ〳〵兒童は綴方が好きではない。提出された作品をいち早く目を通す事によってその時の學級全體の綴方環境を洞察してゆく所にも指導上の技術がひそんでゐる事を考へたいものです。

△秋の忙しい行事のシーズンは又兒童の題材を拾ふに最も恵まれた時です。御送稿を御待ちします。（M生）（昭11・11・15）

「岐阜綴方教育研究会」によって選ばれ、「少年少女綴り方」欄に掲載される綴り方は、年を追って郡市の広がりを見せるようになり、岐阜市及び岐阜市周辺の稲葉郡に加えて、武儀郡、益田郡、海津郡、本巣郡、安八郡、加茂郡などの学校の作品がみられるようになっている。また、掲載作品の質的な高まりにおいても、例えば前掲の綴り方「ざんぱつ」は、「赤い鳥」（昭和八年一月号）に載せられるほどのものとなっている。

そして、この研究会同人を中心とした活動は、復刊「赤い鳥」岐阜支部会員の増加にもつながっていった。「赤い鳥」巻末の愛読者名簿欄には、昭和六年から七年にかけて、可児郡中村部会[注(2)]10を初めとして、大垣市中小21、本荘小12、安八郡神戸小10、南長森小11、金華小22、女子師範附属小17、岐阜師範附属小49などが見られ、それ以後も高山南校、京町校、美濃校、石津校、久瀬第一校、西郷小などの学校名が出ている。「赤い鳥」綴り方に対する関心、意識は、休刊に至るまでの前期「赤い鳥」の頃と比べて、大幅な広がりと高まりを見せてきたことがわかる。

この頃、岐阜市・本荘小へ指導者として招かれた奥村　保（女子師範附属小）が、その時のことを「北斗」[注(3)]（第9号、昭7・3・20）に、書いているが、その中で奥村は、

……この學校は、人も知る通り、綴方の研究學校だ。校長高木氏は熱心な研究家で、鈴木三重吉派の人。……安池君は綴方の主任で、この一年間、此方面の中核となって、本校綴方進展の上で一段の光新を放ち本校をして綴方學校てふ名声を挙げしめたと聞く。……

と述べ、参観した二つの綴り方の授業と、その後の全校研究会の様子を書いている。

本荘小は、大正期末、福富高市が孤立無援に近い状況の中で、「赤い鳥」の綴り方、自由詩の指導に専念し、その結果として可児郡・錦津小へ転任させられた学校である。それが、校長も「赤い鳥」復刊に当たって推薦者に名を連ね、全校研究会のために二つも綴り方の授業を公開しているほどの変化を示すようになっている。「赤

い鳥」復刊を支持する岐阜の状況の一つが、こうしたところからも窺われる。

それでは、岐阜県におけるこのような状況が、「赤い鳥」に掲載される綴り方や自由詩の作品数に反映したかというと、必ずしもそうではなかった。後期「赤い鳥」に掲載された作品数、学校名を示すと下表のようである。

昭和四年までの前期「赤い鳥」に掲載された綴方五十五篇、同自由詩百四十八篇に比べると、期間が半分、作品が長編化したことによる掲載総数の減少ということもあるが、「赤い鳥」岐阜支部としての前述のような活動が盛んになった割りには、ぱっとしない、という印象が残る。

その中にあって、「赤い鳥」掲載の綴方作品数で目につくのが、稲葉郡北長森小学校（現・岐阜市長森北小）である。掲載された四篇のうち、三重吉が長い評を書いている作品を見てみよう。昭和七年六月号にのったものである。

かしは

岐阜縣稲葉郡北長森小學校尋四　大畑一夫

「ごめやす。かしは、二十錢くんさい。」といきなり大きな聲で家へ入つていつた。奥の方から「かしはかな。」と言つて出てござつた。をばさんは、急がしさうに、

《表1》後期「赤い鳥」掲載の岐阜県綴方・自由詩作品数と校名

年(昭和)	掲載総数	綴方	校名	自由詩	校名
6	58	5	可児・中3 大垣・中、北長森	5	古井3 可児・中、本荘
7	48	2	北長森2	1	北長森
8	40	1	北長森	4	長良4
9	43	2	高山・南 岐阜・本郷	4	長良4
10	44	2	金原2	2	明智2
11	32	0		0	
計	265	12		16	

◇綴方　北長森4、可児・中3、金原2、大垣・中、高山・南、岐阜・本郷
◇自由詩　長良8、古井3、明智2、可児・中、本荘、北長森

「ちよつと待つとつてくんさい。」と言つて、どこかへお使にいきなさつたのか、表の方へ出て東へ走つていきなさつた。どこ

からか、ごちそうのにほひが鼻をつくやうに、にほつてくる。ばんの上に、はかりがある。その横に、でばがあつてぴか〳〵光つていかにもよく切れさうだ。手ぬぐひが、だらりつとだらけてゐる。僕は、りよつてまつてから手をふくのか、又は、はものでもふきなさるのかと、ふしぎに思つた。切ばんの上には、血のあとや、でばのあとが一ぱいついてゐた。入口には名札がかけてないし、こゝの子には一ぺんもあつたことがないから、こゝは父も子供もないなあ、と思つてゐたら、ガラツと戸をあけて、

「ようまつとつてくんさつた。」と言つてあせを出しながら、をばさんが入つて見えた。手や顔をふいて料理にかゝりなさつた。そこでふと氣がついた。お母さんがわすれぬやうに「ちやわんむしにするのだから、一番えゝところをもらつてこいよ。」と言ひなさつたことを忘れてはならぬと思つて、

「をばさん、茶わんむしにしるのやで、一番えゝところをくんさい。」と言つたら「ちよつと今きらかいたで、ないわな。わるかつたなも。そんなら中のところでどうやな。」と言ひなさつたから「ほん。」と言つた。「ほんならおつかさんに、一番えゝところはないで、中のところではいかんかなと、かしは屋のをばさんが言ひなさつたんなと言つてくんさいな。」と言ひなさつた。

戸棚のやうな中から、首なしで毛がむしつてあつて、つばさや羽のあとがぼろ〳〵とついてゐる、そして足は眞黄で、ゆびはしほつとしてゐるにはとりを、足の方を持つて、ばんの上に置きなさつた。はじめに足を切りなさつた。そしてせ中にきずをつけなさつたと思ふと、じゆる〳〵と蛇のやうなものがつゞいて出て來たから、「それなんやな。」と聞いたら「わつちんたあでもある、腸やがな。」と教へて下さつた。えぶくろ、卵といふやうに色々なものが出て來る。をばさんは骨と骨との間の肉をきれいに取りなさるから、をばさんは細かいところまで取りんさるなあ、鳥屋といふものはこんなものかと思つた。

をばさんは肉を切り取つては、つきたての餅でもひねり取るやうに皿の上に手がるくなげなさる。その度にびしや〳〵と勢よく音がする。きもはえぶくろのところから出て來た。にはとりの腹の中はこんなものかしらんと思つた。ふとをばさんが「おまはんは北一色の重吉つあんどこの子やろ。」と言ひなさつたから、いやらしかつたが、「をばさんはよう知つてをんさるなも。」と言つた。さつと顔色をかへなさつた。をばさんは僕の返事が氣にさはつておこりなさつたのか、なんぞ言ひなさるかしらんと思つて心配をしてゐた。をばさんは急にぱた〳〵とでばを下において、えらそうに兩手をぬつとつき出し、眞赤な

顔をしながら「あァあ」と大きな口をあいてあくびをしなさった。

肉は皿に山盛りになった。それを竹の皮に包んではかりにかけて見なさったら、ちようど百目のところであった。「あゝよかった。」とをばさんは一人言を言ひなさった。「おほきに。」と言って僕にその包を渡して下さった。金を渡して「さいなら。」と言って戸をあけて出て行きかけたとき「おほきに。又今度買ってくんさあいな。」と言ひなさった。

家ではお母さんが茶わんむしの用意をしてゐなさるだろうと思って家へいそいだ。

この綴方に対して、三重吉は次のような選評を書いている。

第一作の大畑君の「かしは」は、ありのままを澁滯なく寫し上げてゐる、陰影のある寫生的な佳作です。最初に「ごめやす。かしは二十錢くんさい」と、大きな聲で言ひ〳〵店へはいる、あそこでの、店のをばさんとの應對が實感的に躍動してゐて、出發からして、場面の空氣が活き出てゐます。をばさんが外へ出かけたあとで、一人で待ってゐる間に、おのづと目にうつる切臺の上や、ぶら下ってゐる手ぬぐひなぞについてのすべての叙寫も、全く自然的で、店の光景をよく寫しゐがいてゐます。「入口に名札も出てゐず、この家の子どもといふものを見かけたこともない、こゝは、をばさんきりの家で、をぢさんも子どももゐないのだな」といふ叙述も、店の或空氣を浮ばせてゐます。そのうちにをばさんがかへって來る。お母さんの注意をおもひ出して「茶わんむしにするのやで、一ばんいゝところをくんさい」といふと、「いゝところ、ちよっときらしてゐて、ないわな。中どころではどうやな」と聞く。「ほん」といふと「ほんならお母さんにかう言ってくんさい」といふ、あすこの對話も實感的です。ついで、をばさんが、戸棚からとり出した鶏についての觀察や、内臓がじゆん〳〵にとり出されるのを、めづらしがって、「それは何」などゝ聞いたりするところ、それから、をばさんが骨の間の肉の細かいのまでも一々きれいにそぎとるのを、鳥屋だけあって、こくめいなものだと感心するところなぞも、實感が出てゐて、子どもらしい、いき〳〵した無邪氣さが生きをどってゐます。をばさんが肉を切りとっては皿の上になげるのを、つきたての餅でもひねりとるやうにと言ったのも子供らしい感受でおもしろいです。投げると、ぴしやといきほひのいゝ音がするのを見のがさなかったのも觀察がよくとゞいてゐます。をばさんが、ふと、あんたは、どこ〳〵のうちの子だらうと聞く。きまりがわるかったが當ってゐるので「よう知ってをんさるなも」と言ったが、それが大人にたいし

て、からかふやうな、生意氣な語調にきこえたものか、をばさんは、さつと顔色をかへる。それを見て、何か言つて、おこり出しはしないかとしんぱいするといふのも子供らしくておもしろく、事實の展開として興味があります。をばさんが、ゐばつたやうに兩手をぬつとつき出して、まつ赤な顔をして、あゝんと大あくびをしたといふのにも、たま〳〵その人柄がゑがけてゐます。男まさりの氣性も出てゐます。肉を竹の皮の上において、はかりでかけてみると、ちようど百目だつたといふのや、をばさんが「あゝ、よかつた」と一人ごとを言つて「はい、ありがとう」「さいなら」「ありがとう。又買つてくんさいな」と送り出すまでのところも、氣分がよく出てゐます。要するに作として、不要なところをだら〳〵かいて、緊要な部分が疎略だつたりするやうな不均等なぞが全然なく、事象を活畫的によくとりまとめて、陰影ある展開を見せてゐる點が誇です。

北長森小の児童の綴り方は、生き生きとした子どもの生活が岐阜の方言と結び付いて、いかにも楽しい雰囲気を醸し出している。前の「教育新聞」に載った「ざんぱつ」と、「赤い鳥」に掲載された「ざんぱつ」を比べてみると、方言部分は横に標準語（共通語）で小さく書かれているほか、例えば「おつ母さん」が「お母さん」に、「兄様」が「にいさん」に改められているので、恐らくこの「かしは」においても、原文は、もっと岐阜方言の味が出ていたであろうことが推測される。

この北長森小の児童の綴り方が初めて「赤い鳥」に掲載されたのは、復刊の年、昭和六年の十二月号に載った「火事」（尋四・林勝義）の作品である。これについて、翌七年二月号の通信欄に次の一文が載せてある。

▽本年は兎角氣候不順調で先生の御健康の程が心配です。今回は林勝美君の「火事」を入選していただき、加へて詳細な御高評を拜し誠に有難うございました。御承知の通り轉任後僅か半年で十分の努力を積んでをりませんのですが、毎月の御選評の御指導によつて一生けんめいに邁進してをります。今度の入選はほんとに奇蹟的な榮譽でございました。深く拜謝いたします。お蔭で、兒童は非常な昂奮をもつて創作に向ひます。どうかして「赤い鳥」に出していたゞいて恥しからぬ作品を得たいと思ひます。「火事」の中で「着物をきやし」とありますのは、「着物を着ないで」の意味です。なほ御多忙な先生に兩度の御講話をお願ひするのは無理なことだとは思ひますが、當地方の聲は今一度の御講演を熱望してゐます。兩度の御來岐を御願申します。（岐阜市外、北長森小學校、牧田吉男）

これによって、「火事」の次に掲載された前掲の「かしは」、その後

に続く「あはれな犬」、「ざんぱつ」の四作品とも、同一学年であり、この牧田訓導の指導になるものと考えられる。

牧田吉男は、岐阜綴方教育研究会の会員であり、この「赤い鳥」に載った通信からも分かるように、「赤い鳥」綴方への取り組みに極めて熱心な教員であった。昭和六年の「赤い鳥」五月号の通信欄にも、前任校本荘小・牧田の名前で投書が載っており、「赤い鳥」復刊と共にその活動が認められるようになってきたと見ることができる。

牧田は、大正十二年、武儀郡大矢田小学校が初任であった。大矢田小には、綴り方指導に関心を寄せる教師がいたようで、大正七年の「岐阜縣教育」に「口語本位綴方教授私見」（鷲見治喜次）が二回にわたって載り、「自作文と所感」（秋峰生）も掲載されている。その内容から、この当時としては新しい綴り方指導の方向を模索していたことが分かる。そうした雰囲気が牧田の勤務した頃にも残っていたことが想像され、牧田の綴り方指導への興味関心を抱かせたのではないかと考えられる。

大正十四年、島小へ転任した牧田は、そこでの勤務四年間の最後の一年余を、久々利小から転任してきた福富と一緒になっている。そして、福富の指導による「お母さんの病気」（綴方）「松の中」「蚊帳」「つばひろ帽子」「夕方」「妹」（自由詩）など、子どもの作品が毎号「赤い鳥」に載せられるのを目の当たりにすることができた。そこから、「赤い鳥」綴り方への感化を強く受け、その行き方に共鳴し、その実践に取り組むようになったことが考えられる。そして福富との結び付き、「赤い鳥」とのかかわりが強くなり、この関係は、昭和四年、福富が長良小へ、牧田が本荘小、次いで北長森小へ転じてからも続いたことになる。

前掲牧田の通信の末尾に述べられている内容は、三重吉が昭和七年夏、再度来岐し講演会を持っことについて要請したものであり、また、『帽子をかくさせるな』所収の三重吉の書簡（昭5・8・15）の宛て名が、「牧田様・福富様」と連名になっており、「御両君の各十二日、十三日御出しの御懇書拝誦。引つゞき御奔走下さり恐縮してをります。」と書き出されているところからも、牧田が福富を助けて、自らの実践だけではなく、岐阜における「赤い鳥」綴り方の一層の普及発展のためにも力を注いでいたことが推測される。

前掲「かしは」に対する三重吉の選評は、児童の綴り方と同じくらいの分量をとって書かれている。後期「赤い鳥」になって、三重吉の選評の分量は、綴り方作品と同じかそれ以上という傾向が特色として見られるが、これは、「赤い鳥」復刊最初の号（昭6・1）の「綴方講話」で三重吉が述べたことと関係がある。

以後だん〳〵にくはしく講話しますが、綴方の指導について

は、私が毎號實作をかゝげて鑑賞批評をする、この選評が何よりもの御參考になるのですから御注意下さい。つまりこれによつて、綴方の實質といふものは、どんなものであるべきかが具體的に分かり、めい〳〵の兒童の作をどこまで導き上げて來なければならないかの標準もつくわけです。言葉をかへていふと、私の鑑賞を味覚することによつて綴方の批判力がぐん〳〵養成されるのです。作品としてどういふところが、いいのか、どういふところが缺點となるのかといふことが、製作的に、しぜんと飲みこめて來ます。この修得そのものが指導の實力となるのは言ふまでもない話です。つぎには兒童の綴方を引上げていく手段としても、みんなの製作を、私の鑑賞のとほりに味つて、作の部分と全體との價値を飲みこませること、同時に一面には、必ずすぐれた入選作をよまし、それを私の鑑賞のとほりに嘗め味はせることこの二つによつて、しぜんと、兒童の觀察を導き、感覺を鋭くするより外には事實何等の方策もないのです。この意味においても、綴方の成績は一に指導者の、行きとゞいた鑑賞力（つまり批判力）によって上下することになるのです。……

ともかく、以上の點に、私の選出作と選評との重大な役立ちがあるのです。

「赤い鳥」通信の中で、牧田が「毎月の御選評の御指導によつて一生けんめい邁進してをります。」と書いたのは、こうした三重吉の考え方に忠実に従って綴り方指導を行おうとしていたことを物語るものであり、それが、岐阜県における後期「赤い鳥」綴り方の代表的な作品を生み出すことになったと考えられる。このような足跡を残した牧田が、昭和十二年に三重吉、その翌年に福富高市を失い、更に戦時色が一層濃くなっていく中で、どのような綴り方指導を行ったのかについては、まだ詳らかにしていない。

牧田は戦後、可児郡春里村や益田郡川西村の青年学校に転じ、稲羽町・共和中学校長で退職、昭和五十年に没している。

後期「赤い鳥」の自由詩部門で掲載作品数が目立つのは、稲葉郡長良小学校で、この指導者は福富高市である。

福富が勤務した長良小は、当時学校ぐるみで職業教育指導に取り組み、各地からの参観者も相当多かったようである。『帽子をかくさせるな』所収の野々村美英の回想によると、「この職業教育指導を一歩進めた職分教育、即ち、一人一人が自分の役割を完全に果たせる教育（職分遂行）として筋金を入れたのは、福富先生がその第一人者であったと思います。……そして、その書かれる文章即ち、作文能力は素晴らしいもので、何時でも、いろいろな原稿の下書きは、先生の手になることが多かったように思いました。」とある。福富はこの時期、学校の研究主題に基づく実践研究に忙しかったよ

うである。事実、山羊の飼育担当であった福富による「山羊飼育の経済学」(昭6)は、三か年にわたる実践のまとめとして、その熱心な取り組みと成果が説得力を持って書かれている。

このような多忙な勤務状況の中でも、福富は、本荘小以来の自由詩の指導に力を注いでいたのである。

花賣

岐阜市長良小　高等科二年

加藤喜代次

町の朝、
花賣の聲が、しづけさをやぶつて、
たかく、ひくゝこだましながら
きりの中に消へていく。

昭和八年十月号の「赤い鳥」に載ったこの詩の題「花賣」は、自由詩佳作、高等科部門の表題にもなっている。

三

後期「赤い鳥」で、岐阜県として注目すべき人物に、今井鑑三がいる。今井の場合は、指導した子どもの綴り方や自由詩が「赤い鳥」誌上に載ったというのではなく、今井の書いた童話が、たびたび「赤い鳥」に掲載されたのである。

今井鑑三の作品「青梅」が、入選童話として初めて「赤い鳥」誌上に載ったのは昭和六年の七月号である。今井は、益田郡出身、昭和三年岐阜師範学校卒業、童話初入選の時は同郡小坂小から萩原小へ転任した年であった。続いて同年九月号には「水およぎ」という童話が載せられた。

ちょうどこの頃、新美南吉の入選童話も「赤い鳥」に載るようになり、今井の童話が載り始めたのと同じ年の八月号に「正坊とクロ」「張紅倫」が十一月号、そして「ごん狐」は翌七年一月号に載っている。今井鑑三と新美南吉とは、三重吉の選によって「赤い鳥」に童話を載せ始めた同期生、ということができる。

今井はこの後、「川島君」(昭6・12月号)、「大時計」(昭7・3月号)、「良太」(昭8・7月号)、「ひろつた銀貨」(同年・9月号)、「虫歯」(昭9・8月号)、「ねずみ」(昭10・11月号)と、たてつづけに作品を「赤い鳥」に発表している。

このうち「大時計」については、三重吉が同号末尾の講話欄で、「入選創作童話の『大時計』も、おもしろい着想です。空想の作ならひじような手柄です。」と認めたほどのできばえであった。

今井は通信欄にも二度ほど書いている。次に挙げたのは、「水およぎ」が「赤い鳥」に掲載された後のものである。童話を掲載してもらえたことのお礼の後に、「原稿をお返し下さいましたとき、先生の御批評及び御加筆の跡を見て、自分の貧しい作品が、大きな力

にグン〳〵引き上げられていくことを痛感しました」と述べ、次いで綴り方について次のように書いている。

……子供の綴方につきましては、前任校において、苦しみ悩みつゝ貧しい研究を捧げて來ましたが、その子供たちと別れて、現在新しい學級を受持ち新しい出發點に立つてをりますので、まだお目にかけるやうな作品を産み出し得ない状態にあります。教員の轉任は、すべてのまき直しであります。過去の自分の姿を意識せしめ、新しい道に進む暗示を與へてはくれますけれども、何となしに羽をもがれた昆蟲のやうな感が深いのです。近く、私の方の教育會の人々、及び私たちの組織してゐる青年教育者の會が主になり先生をお迎へして講演會を開かうなどゝ、寄々話合つてゐます。隨分遠方ですから、先生に來て戴けるかどうか疑問です。私達としては、岐阜支部の人とも語らひ、明年八月までにはぜひお願ひ申したいものと考へてゐます。……

ここからも分かるように、今井鑑三は、自身の書く童話を通して「赤い鳥」とつながるばかりでなく、綴り方を通しても「赤い鳥」につながる綴方人であった。なお、今井がこの通信の後半で触れた益田郡教育会は、拙稿「転換期の岐阜県における綴方教育概観」（「岐阜教育大国語国文学」第十四号所収）の冒頭に引用した「今後の岐阜県教育への提言」をまとめた教育会である。また、今井がこの通信を出した時に勤務していた萩原小学校は、大正期末の「赤い鳥」自由詩欄に、本荘小・福富高市や今渡小・奥村靖雄の指導による自由詩と並んで、十八もの自由詩作品を載せた実績を持つ学校である。

昭和十年前後、そして特に戦後と、益田郡教育の中心となって活躍した戸谷重太郎[注14]の話によると、この大正期末から昭和の初めにかけての時期、萩原は南飛騨の交通・物流等の中心地であり、文化的な雰囲気も高かった。町には諏訪クラブがあって、俳句、美術、テニスなど文化・スポーツ活動が盛んに行われ、萩原小の教師も多く参加していたということである。「赤い鳥」綴り方・自由詩も、こうした文化的空気の中に溶け込み、特に「赤い鳥」に掲載された自由詩を指導したのは、遠藤伊平という文学青年の教師であったということである。

戸谷氏の話から推測するに、この遠藤が、当時の満州へ渡った後の萩原小の「赤い鳥」綴り方の流れを、今井や戸谷が受け継いでいったと考えられる。また、今井が童話の創作活動を通して「赤い鳥」と結び付いていった背景には、もちろん今井自身の素質があったとしても、若い今井が勤務した萩原という地区の文化的雰囲気、萩原小の文化的伝統が、その才能を伸長させるのに寄与していたことが十分考えられる。

今井鑑三は、昭和十四年、岐阜・加納小（女子師範代用附属）へ転じた。その加納小には、大正十四年、主事・稲垣国三郎[注15]の時に創刊された「撫子」という保護者会機関誌があった。年二回ずつ刊行されてきたその冊子の終わりには、児童文の欄が二、三十ページほどとられ、そこに子どもの綴り方が載せられていた。

今井は、転任してきた年の「撫子」三十号（昭14・7・20）から児童文の欄の担当になったのであろう、その冒頭に、「綴方について」と題して、保護者へ向けて次のように書いている。

よい綴方といふのは、一口に言へば、子供なりの生活が、子供なりのことばで表されてゐるものと言へませう。子供の生活は大人の生活とは又、一種ちがつたもので、大人から見れば、いはゆる子供くさいことや、まだるこいことや、時にはとつぴなことや、又、時にはバカげたことさへあります。次に出してある綴方作品をお讀みになつてもわかります。さういふものが書いてあるのがいゝと言ふのではありません。考へねばならぬことは、大人から見ればその様に思はれる生活を、子供は子供なりに眞劍に、まじめにやつてゐるといふことであります。さうした生活を綴るのですから、その綴方には、子供の興味、考へ方、見方、感情といつた子供の全人格が表れてきます。さうしたものがはつきり、又くはしく書かれてゐるものこそ價値のある綴方といふことになります。そして、學年が進むにつれそれらのものが指導によつて次第に磨かれ、深められ、熟してくるのであります。かういふ考へ方からすると、綴方を書くといふことは、唯、文を書くおけいことといふ外に、綴方を書くことによつて子供の生活を深める、つまり一つの人生勉強、生活勉強といふ意味にまで進められてくるのであります。

さて、さうした子供の生活を、そのまゝ表はさせるには、それに似合つた、つまり子供なりの言ひ振りで書くことが大切であります。どうかすると、大人の言ひ振りになつたり、大人の書く文章ことばになつたりしますが、それはちやうど、子供が大人の洋服を、着たり、着物を着たりするやうで、寸法も、柄も似合ひません。やがてはそれを着ても似合ふ時がくるし、又、そのやうに育てなければなりませんが、凡て一足飛びや、無理は子供を育てるには禁物であります。

次の作品の中にも、子供なりのちゑや、考へ方や、工夫をしてゐる、つまりねうちのある生活を、いき〳〵と綴つてゐるのもありますが、また、それが少しせまかつたり、固まつたりしてゐるのもあります。さうしたものは文章も又、固くなつて、思ふまゝにスラ〳〵と書けてゐないやうです。やはり、子供の時代は子供の時代として十分に伸してやることが、子供を大き

く育て上げることになりませう。

今井はまた、「撫子」三十二号（昭15・7・25）でも「児童文の見方」と題し、保護者に向け次のように述べている。

〝撫子〟に載せる兒童文について批評を書くことは、これで三回目ですが、一回毎に文がりつぱになつて行くことを感じます。このことは、學校としてまことにうれしいことで、お讀み下さる父兄の皆様もきつとお喜びのことゝ思ひます。

それは、唯、文章が上手になつたといふやうなことだけではありません。元来こどもの文といふものは、こどもが、こどもの色々な生活を、こどものことばにむすびつけて書きあらはすものでありますから、文章（ことば）のうしろには、いつでもこどもの生活がひらめいてゐます。ですから、こどもの文がよくなつたといふことは、こどもの生活や、生活の仕方がよくなつたといふことであります。

綴方といふ學科を考へますと、まことに深い意味があります。言ふまでもなく、こどもが毎日勉強してゐる學科といふものは、讀方にしろ算術にしろ、國史にしろ理科にしろ、先生から教へてもらふ――こどもから言へば、習ひ、覺えるといふものが多いのであります。…（中略）…それに對して綴方といふ學科は、逆に、こども自身が、自分の持つてゐるものを取り出して先生に示すといふ――言ひかへたなら自分をあらはすといふ學科であります。ですから綴方で書くこどもの文には、修身で習つた道徳にたいする考へ方も、算術で習つたこまかい、りくつ的な考へ方も、理科で習つたするどい物の見方も、又こども自身のちゑも、感情も、ことごとくあらはれてくるわけであります。

綴方は、さうした自分の物の見方や考へを、はつきり、わかり易く文に書きあらはすといふ學科なのであります。

それで、こどもの文を讀むときには、どんなところに氣をつけて讀んでやらなければならないかといふことについて申します。

先づこどもの生活を理解してやり、こどもを育てゝやる心で讀むことが大切です。こどもはこどもなりの生活をうそいつはりなく書くのですから、それを大人の生活とくらべて批判したりしてはまちがふことがあります。必ずしも「マヽゴトアソビ」の生活がねうちがなくて「おつかひ」の生活がねうちがあるのではありません。あんなことを書いてはいけない、こんなことを書いては笑はれるといつては、こどもはほんたうの生活を書かぬやうになります。時にはけんくわの文を書くことがあつてもいゝことでせう。大切なことは「マヽゴトアソビ」のあそび方「おつかひ」の仕方「けんくわ」の仕方なのです。――つま

り生活の仕方、――生き方が大切なのであります。明るいくらし方、元氣なくらし方をしてゐるか、くらい考へ方や、まちがつた考へ方や、ひねくれたいぢのわるい考へ方をしてゐないか、やさしい、美しい心持でゐるか、つよい、しつかりした心持でゐるか、注意深い行きとゞいた見方をしてゐるか、淺い考へか、ちゐのはたらいた深い考へ方か、なぞ、どんな生き方――物の見方、考へ方をしてゐるかに氣をつけて讀んでやることが大切であります。むろん、さうしたことは學年によつてちがひがありますから、要は、そのこどもなりにすなほな生活をしてゐるといふことが大切なのであります。

どんな生活の仕方であるかといふことは、文の書きぶりにあらはれます。書きぶりを通してそれを見るのですから、はつきり、よくわかるやうに書けてゐなくてはなりません。美しいことばをつかつてゐるから、難しいことばをつかつてゐるから上手だなどいふことはありません。こどもの知つてゐることばで、やさしく、わかるやうに書けてゐればそれでいゝのです。

たゞ、低學年のこどもは、知つてゐることばも少く、又、言ひまはしも下手ですから、まはりくどく書いたり、又、舌足らずであつたりしますから、讀む方でいろ〳〵判斷したり、すゐさつしたりせねばならないことがあります。

それから「よくわかる」といつても、文全体がよくまとまつてゐてよくわかるといふこともあれば、言ひあらはし方がよくてよくわかるといふこともあります。言ひあらはし方で言へば、同じ「悲しい」といふことでも「私はかなしかつた。」と書くよりも「なみだがポト〳〵おちました。」と書いた方がはつきり、よくわかります。これは、けつして言ひ方が上手なのでなく、それだけ深く感じてゐたのです。つまり、生活の仕方が深ければ、從つて、書きあらはすことばも深くなり、同じことを言つてもよくわかるやうになるのです。「美文」などと言はれた一昔前の文章は、唯、ことばだけで文章を美しくかざらうとしたのです。かうしたものや、小説のまねのやうな氣どつた文章は、綴方ではすゝめてゐません。

學年が進むにつれて、簡單なことばで、よくわかるやうに書けるやうになれば結構なのです。

以上のやうなことを心にとめていたゞいて、兒童文をお讀みになり、又批評をお讀み下さればまことに興味もあり、こどもに對する理解も深まり、こどももしあわせと存じます。

これらに書かれている、子どもとはどういう存在なのか、子どもの生活とはどういうもので、それをどうとらえ、どう考えていくのか、子どもの表現というものの見方など、それを説明する今井の文

章の書き振り、言葉の使い方などの中に、鈴木三重吉・「赤い鳥」の思想が流れていることを感じさせる。

今井はまた、これまでの「撫子」の児童文欄が、ただ綴り方を載せるだけであったのを改め、一つ一つの作品（綴り方・自由詩）に短い評をつけることを始めている。

さてつ

尋三ノ二　澤野喜義

じしやくで
すなの中をかきまはすと
さてつが一つぱいついて來る。
あたまのけみたいに
ひつついて來る。
すなは少しつめたかつた。
さてつは所々
光つて居る。
たくさんとれる。
「はなびをつくろ」
と林君がいつた。
紙につつんで
火に入れた。
からだがふるへた。
もえて來たかと思ふと
けむりばかり出た。
がつかりした。

評……これは自分のやつたことを、そのまゝ書いたのですね。おもしろいことをやつて見ましたね。どうなるかと思つて一生けんめい見てゐるところが目に見えるやうです。「あたまのけみたい」「すなは少しつめたい」「さてつは所々光つてゐる」など、よくきをつけてゐます。だから、おしまひに、けむりばかり出て、がつかりしたといふ心もちもよくわかります。

◇

自てん車

尋四ノ二　西野禎志

自てん車を買つてもらつて間もない頃だつた。學校がすんでから、一人で自てん車に乘つて、笠松の方へ行つた。その日は天氣が大へんよかつた。笠松國道を一人で、自てん車に乘つて行つたら、だん〳〵坂になつて來たらしく、自てん車が重くなつて來た。「もどろうか。」と思つた。だがこゝまで來たから

「思ひ切ってこさう。」と考へて坂を下りだした。ちよつと目がくらむやうであつた。ころばずに坂を下りたので安心したが、まだ早かつた。今度は上らなければならない。「せつかくこゝまで來たが、もう引返さう。」と思つて、今下りた坂を、又上り始めた。其の時だつた。ゆだんして、ペタルをふまなかつたので、自てん車ともにころんだ。「しまつた。」と思つたが、もうだめであつた。足の方がしく〳〵して來たので、見たらすりむけて、血がにじんで居た。ゆびで押さへて見たら、ゆびがべとつとして血がついた。立たうとしたら、何だか足が重かつた。其の時むらさきのはんてんを着て、鳥うちぼうしをかぶつた大工さんのやうな人が、

「坊、ころんだか。」

と笑ひながら行つてしまつた。僕は坊と言はれて、とてもくやしかつた。僕は今度は自てん車がいま〳〵しくなつた。もう此の自てん車に乘つて家へ歸る氣がしなかつた。けれども自てん車を引いて行く事も出來ないので、自てん車に乘つて行く事にした。どこかの人たちがみな見ていらつしやつた。國道を通つて行く時、とても悲しかつた。

家へついたが、家へはいるのがいやであつた。なぜかといふと、やうふくは泥でべた〳〵だし、足には血が出て居るからだ。だがまう夕方だし入らずに居るわけにもいかないから「しかられるかしらん。」と思ひながら入つて行つた。戸を開けてお勝手へ行つた。お母さんは夕御飯の支たくをして見えた。そして僕の方を見て

「どうしたの。」

と聞きなさつたので、僕は小さな聲で、

「自てん車に乘つて、國道でころんだ。」

と言つた。するとお母さんのそばに居た妹が

「にいちやんの足に血が出てる。」

と言つた。そしたらお母さんは

「にいちやんはばかやね。」

と言いなさつた。僕は「叱られんのかしらん。」と思つて少し安心したら、お母さんが

「早くくつをぬいで上りなさい。」

とおこつたようにおつしやつた。僕は「うん。」と言つて上らうとしたら、お母さんが

「しやうがないね、又せんたく物がふえた。」

と言いなさつた。僕はだまつて上つて行つた。すると妹が

「にいちやん、やうかんやろうか。」

と言つてもつて來た。いつもなら「おくれ。」と言つてもらつ

てたべるのだが、今は悲しくてたべられない。
「いらん。」
と言つたら、妹は
「どうして。ほんならまんぢゆう。」
と言つたけれど
「いらん。」
と首をふつた。
「ほんなら、せんべい。」
と言つたから、僕は腹がたつたので
「どこにそんなたくさん菓子がある。」
と言つた。すると妹は
「あらへん、あはゝ。」
と笑つたので、僕も悲しかつた事を忘れて笑つてしまつた。それから妹にまんぢゆうとやうかんをもらつてたべたが、そううまくはなかつた。
評……自てん車からおちた、かなしい、くやしいこゝろもちを書いたのですが、それが、はつきり、そして深く書きあらはされてゐるのはえらいと思ひます。いゝかげんな書きやうでなく、どこまでも自分のこゝろもちをあらはさうといふ考へは大そうよろしい。自分のこゝろもちを書くのに一心なので、少しもムダなところのない、はつきりした文です。とくに、ころんで血の出たことを知つたところ、大工さんのやうな人が笑つて行くところなぞ、自分の書かうとしてゐることがいかにも、はつきりと書けてゐます。家へかへつてから妹にからかはれるところもさうです。
妹にからかはれたけれども、腹立ちまぎれにおこつたりなぞせず、笑つてしまふのはよいこゝろもちです。

これらの「評」の内容、書き振りからも、今井が「赤い鳥」の影響を強く受けて綴り方指導に当たっていることが感じられる。
今井はまた、「撫子」の児童文欄の拡充も図っている。

《表2》「児童文欄」の「撫子」全体に占める割合

号数	発行年月	全体頁数	児童文欄頁数	割合（%）
25	12・3	56	22	39
28	13・7	52	16	31
29	14・3	60	28	47
30	14・7	64	33	52
31	15・3	52	30	58
32	15・7	60	36	60

もともと「撫子」は学校と家庭との連絡を密にする目的で創刊されたものであり、その内容として「發刊の辭」には「各種の通信、感想、希望、兒童成績等」が挙げられていた。この中の「児童成績」が「児童欄」となって、そこに綴り方が載せられたのである。これを創刊号から第三号までで見ると、児童欄は九頁ほど。全体頁数に占める割合は20～24％程度であった。これが、《表2》から分かるように、今井が加納小へ転任してきて「撫子」にかかわるようになって以後、児童文欄の全体に占める割合が50％をこえるようになり、学校文集の観さえ呈するようになっている。

このことは、今井が、前掲の「綴方について」や「児童文の見方」で、子どもの生活、生き方と綴り方との関係、保護者が綴り方を読む際の大切な観点などを、平易なことばで諄々と語りかけたことが保護者が共感し、綴り方――教育の見方、考え方が受け入れられていった結果を示しているのではないだろうか。

今井はまた、「子供なりの生活」など「子供なり」ということばをしばしば使い、「一足飛びや無理は子供を育てるには禁物」とか「子供の時代は子供の時代として十分伸ばしてやることが、子供を大きく育て上げることになる」など、子どもの心、思い、生き方そのものを中心に、その表現としての綴り方を考え、教育全体を考えていこうとする思いを根底に持っていたことが分かる。そこには、日中戦争から太平洋戦争へと向かう緊迫した時代の状況の中にあって、実態のないスローガン、自分のことばではない受け売りのことば、空疎な強がりのことば、そうしたものが溢れ、幅をきかせるようになりつつあったことへの疑問があったのではないかとも推測される。

事実、例えば昭和十三年の「撫子」二八号では掲載綴り方二十五編のうち「兵隊さんへ」「慰問文」など十五編が戦時色に染まった題材となっている。しかし、今井が「撫子」にかかわるようになってからの例えば三二号(昭和15・7)を見ると、三十三編中そうした戦時色を感じさせる作品は、「六十八連隊」(尋常科)、「面会」「欧州大戦を眺めて」(高等科)の三編でしかない。最初の二編は、一つは学校から遠足で出かけたときのものであり、一つは入隊中の兄へ家族みんなで面会に出かけたときのものである。他の号を見ても、作品全体のうち、戦時色の出ている題材のものは、やはり三編までぐらいしか載せられていない。鈴木三重吉の「赤い鳥」綴り方から学んだ精神が、今井鑑三の信念となって強いシンを形成していたことが感じられる。

昭和二十年三月、今井は奈良女子高等師範学校附属小学校訓導となって岐阜県を去った。

四

昭和十一年六月、鈴木三重吉は亡くなり、「赤い鳥」八月号には、三重吉逝去の知らせと共に、「赤い鳥」休刊の知らせが掲載された。そして、その年の十月、「赤い鳥」は、鈴木三重吉追悼号を出し、日本の綴り方教育に大きな足跡を残して二十二年の歴史の幕を閉じた。川口半平は、この「赤い鳥」について、『作文教育変遷史』の中で、次のように評価している。

彼（筆者注・鈴木三重吉）は「空想で作ったものでなく、ただ見たまま、聞いたまま、考えたままを、素直に書いた文章」を寄せてくれるように希望した。ことばの上だけなら、この程度の文章観は当時の綴方教育の先覚者の多くはもっていたといってよいであろう。また、彼の大きい功績の一つとして、綴方に方言をとり入れたことが数えられているが、これも「日常話している言葉そのままで綴る」ということは芦田恵之助等の既に説いていたことなのである。にもかかわらず、伝統久しい「学校綴方」の旧い型から脱け出すということは洗脳的な革命であって、容易になし得ないことであった。…（中略）…その「学校綴方」の旧い殻をたたき破って、子供を子供の世界に解放し、自分の目でものを観、自分のことばで書くということを、ことばだけでなく事実の上に実現させて、子供の叙写形式を最高のものに育てあげたのが鈴木三重吉であった。数限りない作文教育の研究者たちが、思潮の変遷とともに現われたり消えたりして行く中に彼の名だけは、おそらく作文教育のつづく限り、不滅の光を放つことであろうと想像されるのは、決して故なしとしないのである。

川口半平の「赤い鳥」綴り方へのこの評価は、岐阜県の場合を見ても、福富高市、奥村靖雄、牧田吉男などの指導の下で子どもたちが書き上げた綴り方、「赤い鳥」に掲載された綴り方の指導者名はまだ詳らかにならないが大八小、福寄小、高山女子校、和良小、金原小の子どもたちの綴り方の数々を読めば、すべてが首肯できることである。また、昭和前期に盛んになった県下の学校文集、学級文集の中の綴り方作品を読んでも、多かれ少なかれ、「赤い鳥」綴り方の影響を認めることができる。

さらに、「赤い鳥」綴り方は、今井鑑三の場合のように、子どもの「叙写形式」だけにとどまらないで、子どもの生活、子どもの生き方と表現を一体的に捉え、綴り方を通して教育を考えていこうとする方向が、戦後にも引き継がれて行ったことを思うと、岐阜県の綴り方教育の上で「赤い鳥」綴り方の果たした役割は極めて大きいものがあると言わねばならない。

最終刊の「赤い鳥・鈴木三重吉追悼号」には、多くの著名人、全

国の綴方人などから寄せられた三重吉追悼の文が載せてある。その中で、岐阜県から追悼文を載せたのは、福富高市と今井鑑三の二人だけである。このことは、期せずして、昭和前期の岐阜県における「赤い鳥」綴り方の流れを、福富、今井、二人の実践、活動を軸にして考察していくことの妥当性を物語っているように思われるのである。

注

(1) 「加納小学校の一二〇年史　年表」によれば、明治四十四年年、岐阜女子師範学校創設により、稲葉郡加納尋常高等小学校が女子師範学校代用附属小学校となり、以後同一校で加納小と女子師範附属小の二つの校名が使われている。例えば本稿中の「撫子」誌の奥付は加納小学校名、「北斗」誌（後掲）の奥付は女子師範学校附属小学校名となっている。

(2) 可児郡中村は現御嵩町。中小学校には、この当時、「赤い鳥」に児童の綴り方、自由詩作品を多く載せた奥村靖雄が教頭として在職し、今渡小から引き続き「赤い鳥」綴り方、自由詩の指導を熱心に行っていた。

(3) 昭和四年七月に創刊された岐阜県女子師範学校附属小学校内北斗会同人による研究中心の雑誌。岐阜県師範学校附属小学校の方には、大正十二年四月創刊の「研究」誌があった。

(4) 益田郡萩原町出身。昭和五年岐阜県師範学校卒。萩原小にあって今井鑑三とともに「綴方岐阜人」同人として活躍、戦時中には一時期加納国民学校にもいたが、ほとんどを郷里の学校に奉職。退職後は益田郡教育研究所長として、「はぎわら文庫」の編集、執筆、発刊を初め、教育・文化の進展充実に力を注いだ。

(5) 愛知県出身。大正十二年より同十五年初めまで女子師範附属小学校主事。大正の初め広島高師附属小訓導となり、友納友次郎とともに国語教育研究に当たっていた。その著『最近研究　綴り方教授の新建設』（大正5・宝文館）について、滑川道夫は『日本作文綴方教育史2』の中で、「当時の状況のもとで新鮮な開拓的労作」と評価し、また、稲垣の「自由創作の指導」から生まれた作品を例示しながら、「『赤い鳥綴方』出発以前にここまで到達しているという例証」と、綴り方の指導力についても評価している。そのような稲垣が、岐阜の女師附属小主事として、特に岐阜県における綴り方指導にどのような影響を及ぼしたかは不明である。

参考文献

・「赤い鳥」　昭和6年1月号～昭和11年8月号　赤い鳥社
・「赤い鳥」（鈴木三重吉追悼号）　昭和11年10月号　〃
・「教育新聞」　昭和7年1月～昭和15年5月　教育新聞発行
・「岐阜縣教育」　大正7年2月号～同年5月号　岐阜県教育会
・『帽子をかくさせるな』　福富　昜編　あかり書房　1981年1月
・『花ぐるみ＝＝一教師の人生』　川口半平著　母と子ども社　昭和49年8月
・『作文教育変遷史』　川口半平著　岐阜県国語教育研究会　昭和33年10月
・「撫子」　第一号（大正14・12）～第32号（昭和15・7）　加納小学校
・「加納小学校の一二〇年史　年表」　初版昭和41年3月　〃

本稿における北長森小・牧田吉男の経歴等に関しては、前長森北小学校長各務孝男氏に、また萩原小訓導時代の今井鑑三の実践、萩原の文化的風土とその考察については、戸谷重太郎氏に、「撫子」「北斗」等加納小学校関係資料については、加納小学校の奥村　収・高橋義郎・西村覚良の歴代校長先生に、格別のご高配をいただくことができた。